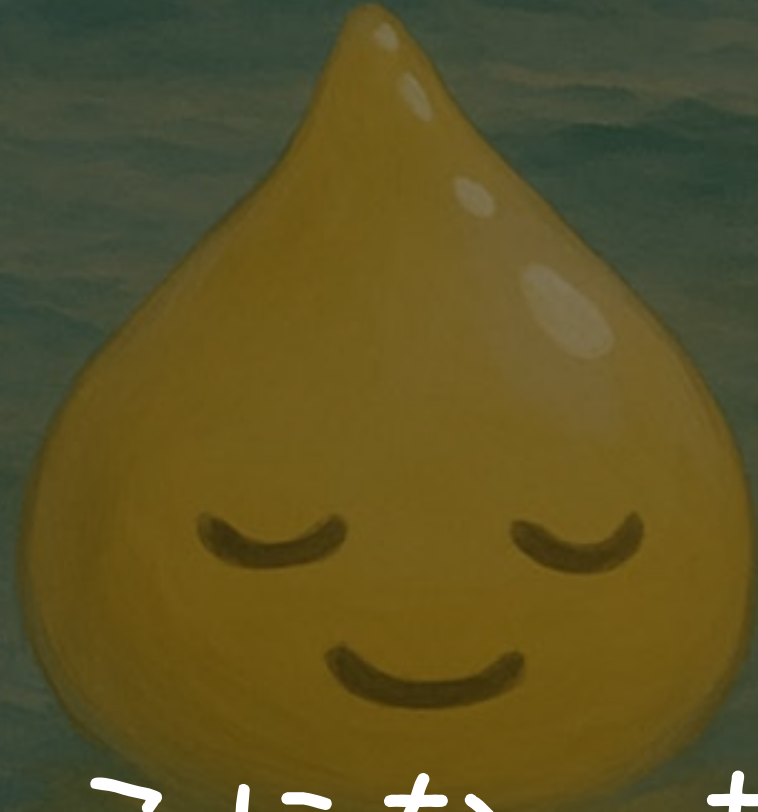




おしっこになったりり

水の様に生きる



雲の中は、白くてやわらかくて、
あたたかいゆりかごのよう。

そこには、たくさんの雫たちが、
穏やかに揺れながら暮らしていました。

そのしずくたちの中に、リリという
ひときわ小さなしずくがいました。

リリは、雲の中が大好きでした。

ふわふわしていて、やわらかくて、
安らかな毎日。

「ずっとここにいられたらいいのに」

リリはそう思っていました。



でも、ときどき風の音が強くなると、
リリ胸の奥がきゅっと引き締まり

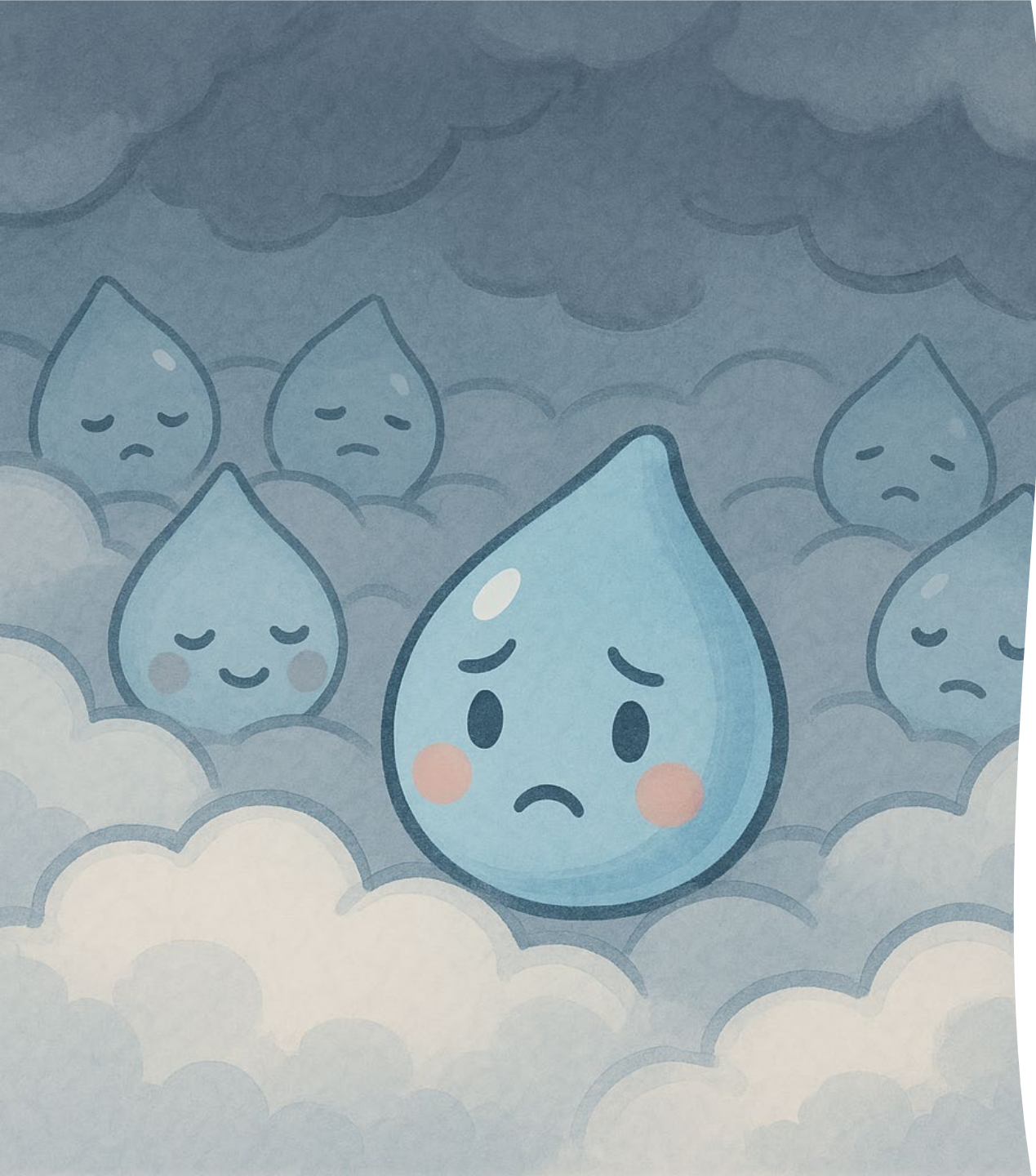
「もし、雲から落ちてしまったら……」

そんなこと、考えたくもないのに、ふと頭に
よぎるのです。

変わりたくない。
何も起きてほしくない。

でも、何かが起きるかもしれないと、
ちょっとだけ不安・・・

リリは笑顔を作りながら、今日も静かに浮か
んでいました。



ある日、そんなリリの住む雲の様子が、少しだけ変わり始めました。

風がいつもより少し冷たくて、ゆらぎが少しざわざわとしています。

でも、みんな少し緊張しながらも、平静を装いながら浮かんでいる。
誰も何も言わない。

リリは、得体のしれない感覚に襲われました。

「なんだろう……

いったい何が起こるのだろう…」



辺りは、夜でもないのに次第に暗くなり、
遠くの空のほうで、ゴロゴロという小さな音が
鳴りはじめました。

「雷……？」

リリの身体は、自然に震え始まりました。

リリには何が起きているのか解りませんでした
が、それが今まで経験した事の無い何かであ
る事は解りました。

「もし、雲から落ちてしまったら……」

リリは、恐怖で胸が張り裂けそうになりました。



地上に落ちてしまうと、きっと、もう戻れない。

雲のあたたかさも、ふわふわも、
全部なくなってしまう。

そう思っただけで、リリの小さな体は
ぎゅっと縮こまりました。

そして雫たちは、みんなで力を合わせて、
誰一人落ちないように手を取り合い、
お互いを守っていました。

リリは心の中で叫びました。

「大丈夫、絶対大丈夫、神様！私を守って！」



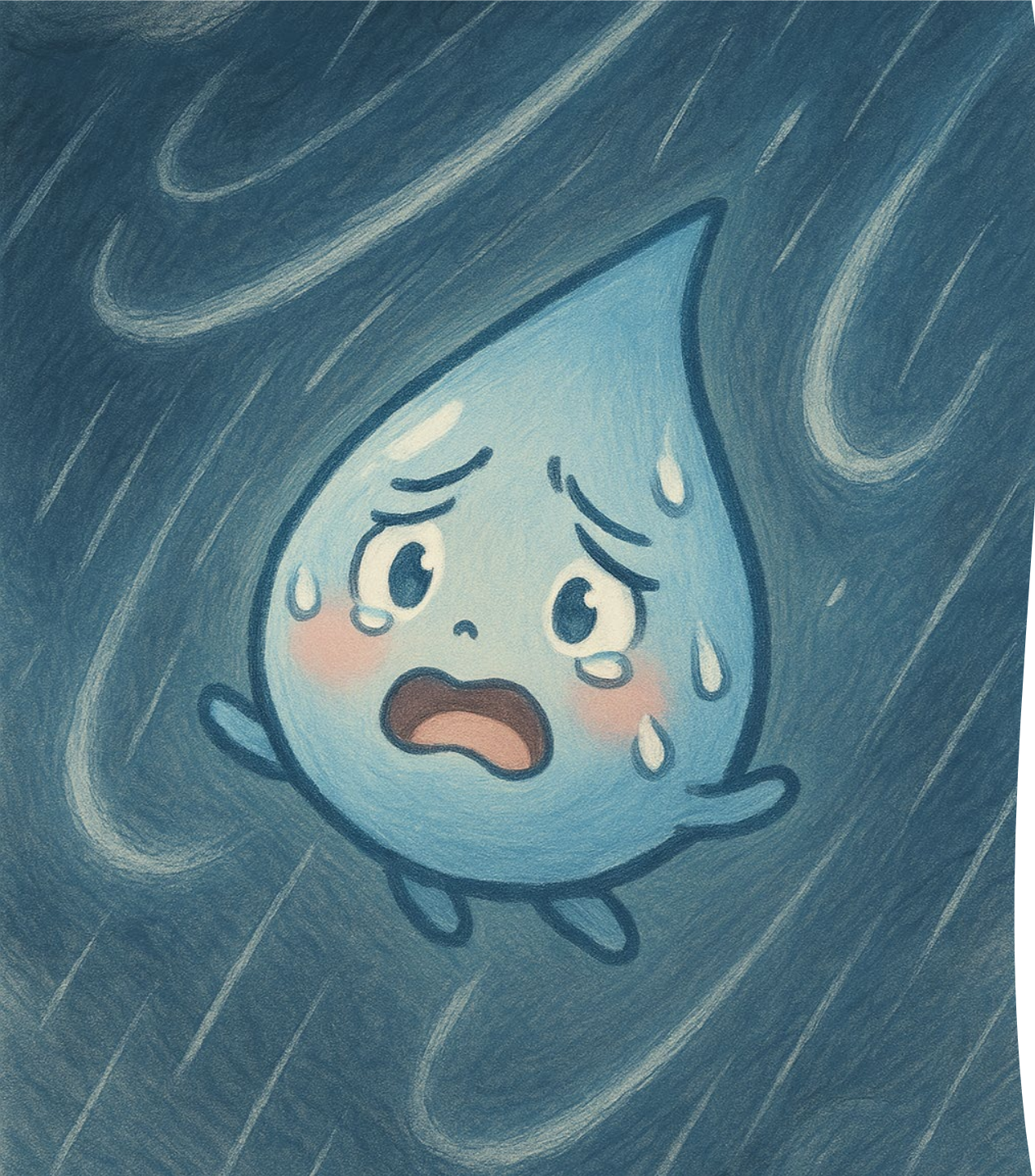
そのときでした。

バリバリッ！！

まぶしい光と同時に、空が裂けるような音が響きわたり、固まっていた雫たちを引き裂くように、閃光が走ったのです。

「うわぁっ……！」

リリの身体は、雲から突き飛ばされるように、空中へと放り出されました。



風がびゅうびゅうと耳元でうなり、リリの体はぐるぐると回転しながら落ちていきます。

目を開けても、何も見えません。

聞こえるのは、風の音と、自分の中の

「こわい！ 助けて……！」

どうしてこんなことに……！」

という声だけ。

どんどん地上が近づいてくる。

「わたし、消えちゃうの……？」

死の恐怖で頭がいっぱいになります



バシャ！

リリはいつの間にかどこかに地上に落ちてしまったのです。

周りは静かで、何かに囲われて空間に閉じ込められたようでした。

なんだか解りませんが、透明の空間です。

そうです
リリは、そのビンの中に
閉じ込められてしまったのです。



誰もいない、
出ることもできない、動けない。

「ここから出られないの……？」

「このまま、ひとりで終わるの……？」

リリは泣きだしました。

「助けて！ 誰か助けて！」

と、リリは何度も、何度も叫びました。

それからリリは、何日も泣いたり叫んだり、
怒ったり、恨んだり

時には瓶の壁を蹴っ飛ばしたり。

でも、なにをやっても

そのビンはずくともしません。



やがてリリは、泣くのをやめて、そっとつぶやきました。

「泣いて嘆いても、ここからは出られないんだ！」

「何しても無駄かもしれないけど、どうせ干からびて死ぬぐらいだったら、最後まで出来る事は全部やろう」

それからリリは、何日もおもっいきり力を込めて体を動かしたり、ビンの中を走り回ったりして、なんとか瓶を倒そうとしました。

ですが、巨大な瓶が
雫の力で倒れるはずもありません。



やがてリリは疲れ果て、最後の力で瓶を中から揺らそうとしていると、突然太陽が照り始め、リリの身体がレンズとなって光り始めました。

その光は、リリの身体を通り抜け、反射してそこを通った巨大な生き物の目に留まりました。

その巨大な生き物は、その瓶に興味を持ち鼻でクンクンとつつきました。



するとその瓶は、コロンと倒れ

リリはその瓶からスルッと出る事が出来たのです

「やったー！でれたぞ〜！」

リリの努力を神様が見ていてくれたんだ！

最後まであきらめない心がお天道様に通じたんだ

と、リリは飛び上がって喜びました。

そうやってリリが喜びを全身で味わっていると・・・





ブォン！

ホッとしたのもつかの間

車が目の前を通り過ぎ、

うわぁ～！

リリは泥を思いっきりかけられてしまったのです。



「僕はもうキレイな雫じゃない……」

リリはくすんで茶色になった自分を見て、また悲しくなりました。

あんなに頑張って、やっと自由になったのに
神様が力を貸してくれた……。

そう思ったのに……

こんな醜い姿になるなんて、これからどう生きて行けばいいんだ……

そう思いながら、リリはトボトボ歩いていました。



周りの人々は、黒ずんだリリを
みて、心配そうにしています。

でも、その視線はリリにとって、
バカにされている様にしか取れ
ませんでした。



そこで、リリは思いました。

「どうせ一生こんな色なんだったら、
この色の自分を楽しんでやる！」
と、開き直り、

褐色に焼けたサーファースタイルで
街を闊歩し始めたのです。



すると…

ある雫が
話かけてきました。

「YO！君！COOLだね～」



「わーカッコイイ！」

「ステキな褐色ね～」

そう言って、
沢山の人が集まって来て…

リリは一躍人気者になった
のです。

そうして人気者に成ったリリは得意に成って、人々を従えては毎日どんちゃん騒ぎのパーティー三昧！

Ｃｏｏ！な褐色の雫リリの噂は瞬く間に広まり、夜な夜な沢山の雫が集まりはじめたのです。

「最高だぜ！べいび～」

リリは最高の気分には浸っていました。





でも、そんなりりの背後に、
なんとまた、あの
巨大生物が・・・

それに気が付いた他の雫たちは
大慌てで逃げようとしてます
が・・・

有頂天なりりは気が付きません。



ペロリ

巨大な舌が、
リリ達を一飲みにしてしまいました・・・

「あ～～～」

リリはついに巨大生物に
飲み込まれてしまったのです。



気が付くとリリは
真っ暗な空間に居ました。

何の音もしない、真っ暗な空間
リリは思いました。

ついに地獄に落とされたのか？

パーティーばかりして遊んでたから？

神様への感謝が足りなかったから？



そんな事を考えながら、その真っ暗な
空間でリリー人で、しくしく
泣いていました。

すると、
足元で何か小さな虫の様な生物が、
喉を乾かして干からびているのが
ぼんやり見えてきました。



何だろう？と思ったリリは、その虫の
ような生き物に指先で触ってみると

リリから出た水分が、その干からびた
虫にスッと吸い込まれ

虫はたちまち元気ピンピンに飛び跳ね
始めたのです。



よく見てみると、周りにはそうした虫が沢山転がっているのが見えて来ました。

リリは思いました。
どうせここは地獄なんだし、
彼らに僕の水分を全部渡して、
潔く消えてなくなろう

最後に少しでも、何かの役に
立って消える事が出来れば
それでいいや



リリはそう思って、足元に
転がるその虫たちを

一つ一つ元気にしていった
のです。



そして、ついに、自分の
水分を使い果たそうとし
たその瞬間



真っ黒な空間が
ぐるんぐるんと動き出して

リリはまたどこかへ流されてるよう
に飛ばされました。

「みんな～さようなら～」

リリは、元気になった虫たちに
人生最後の別れと、スッキリした気
持ちでお別れをした・・・

つもりでした。



ボトッ

リリは、自分がこの世から
消えてなくなっただと思って
いたのですが、なぜかどこ
かの地面に落とされました。

あれ？ここはどこだ？



リリはキョロキョロと周りを見回し、周りの様子を伺いました。

遠くに何日か前にリリを飲み込んだ巨大な生き物が、もっと巨大な生き物に連れられて去って行くのが見えています。

「あれ？

死んだんじゃないかったの？」



リリは自分が地獄に落ちて、
そこからさらに消えてなくなったと思っ
ていたのに・・・

まだ生きている事が不思議でなりません
でした。

そしてリリの身体は黄色い液体に変わっ
ていたし、何だかちょっといやな臭いが
します。



でも、リリはもう何も思いませんでした。

「そうか、
今度はこんな色になったんだな！」

「よし！この黄色い自分で、どうやって
みんなを喜ばせられるか？考えよう！」

もう、元の自分がどうだとか、理想の自
分と違うとか、今のリリには関係ありま
せんでした。



今の自分がこれまでで最高であり、この与えられた環境や身体でやって行くしかないだ

もう嘆いたり、悲しんだりしない。
やると決めて、進んで行けば、必ず何かが起こるし、なにかが起った所でそれに対処するだけ

そう思いながら、リリは立ち上がり

「さぁ、次はどんな困難が待っているのかなぁ？楽しみだ！」

そう思いながら

足を一步踏み出したのです



しばらく歩くと、
目の前に今まで見た事もないよ
うな大きな雫の塊が荒々しく騒
ぎ立て、今にもリリに襲い掛か
ろうと迫って来ていました。



黄色いリリは一瞬驚いて、
少しビクっとしましたが、
すぐに笑顔に変わりました。

「次は何が待っているのかな？」



そうして、リリは波に飲み込まれて
いったのですが

そこには全く恐れはありませんでした。

だって、どうせ全部繋がってるし、
リラックスして楽しんでれば、何とか
なるって知ってるから



波にのまれた黄色いリリは、
だんだんと大きな海に
溶け込んで行きました。

こうして、この海にまた一つの
「勇気」がプラスされたのです。

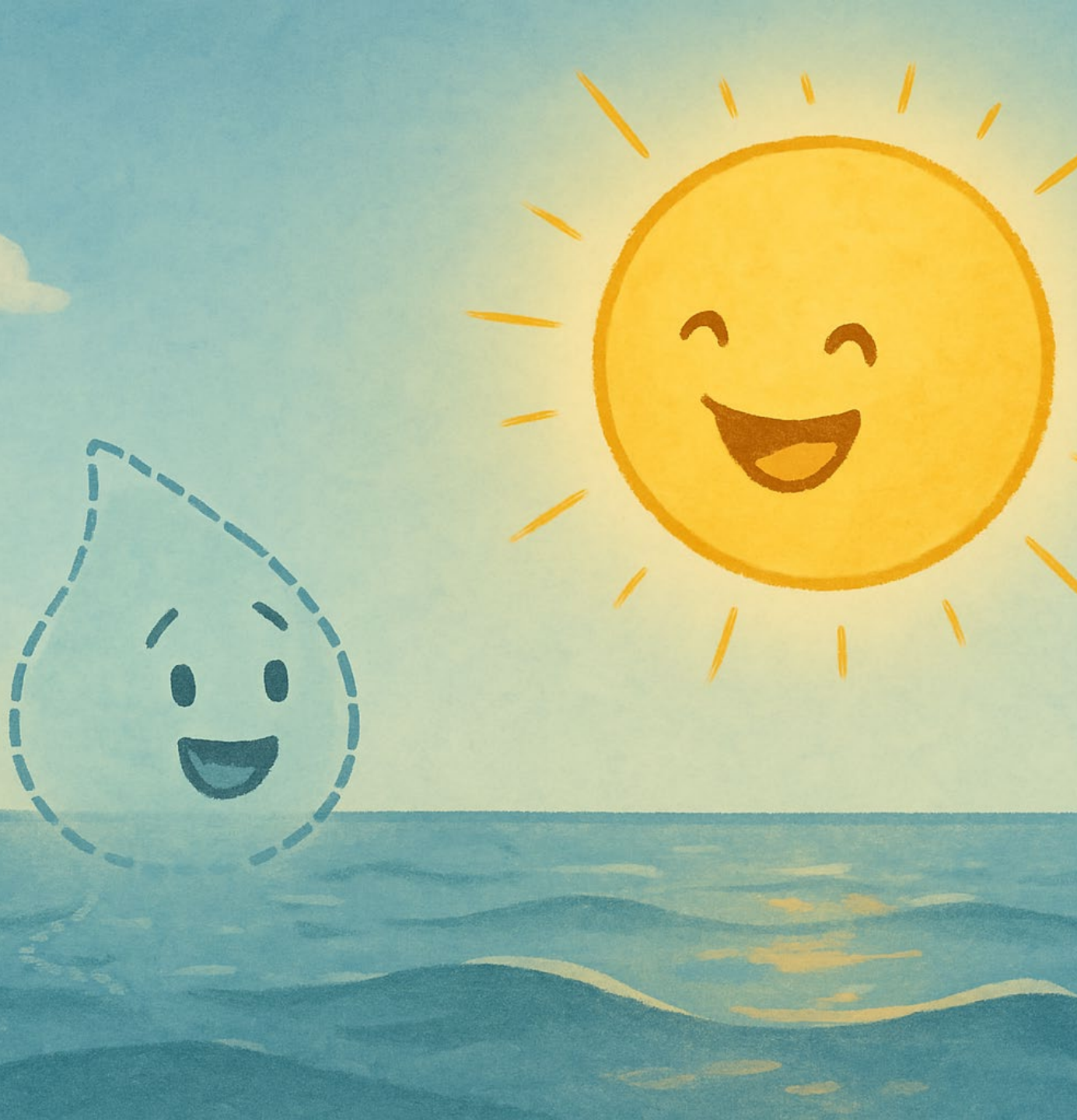
身を任せる勇気・・・



海の一部になったリリは、雲の上に居た時と同じように、穏やかに安らかに漂っています。

そしてお日様が、リリを見守っています。

リリはもうどこにいても、何が起きようとも、うろたえる事はありません。



そしてお日様はリリに尋ね
ました。

「また冒険する？」

リリは笑顔で答えました

うん！



そうしてリリは、またお空に戻って行ったのです。

「またね～」